月曜日　12 月 12 日　神の宮としての体

不死の魂を宿す死すべき肉体という二元論は、人間の体についてさまざまな理論を生み出してきました。例えば古代ギリシアの哲学者たちは、人間の体は魂の牢獄であり、魂は死によって自由になると考えました。この異教思想を受け継いで、今日多くのクリスチャンが、肉体は一時的な魂の住みかであり、復活において再び肉体とひとつになると信じます。逆に、汎神論者は人間の体は神聖であり、神と宇宙は一体であると信じます。万物は神であり、人間の体も普遍的な神の一部であると考えます。このように相反する理論に囲まれているからこそ、私たちは人間の本質についての聖書の教えに堅く立つ必要があるのです。

問3　1 コリント 6：19、20 と同 10：31 を読んでください。私たちの体は「神殿」であり、「聖霊の宮」（口語訳）であるという考えは、どのように私たちの生活スタイルを積極的に変えるでしょうか。

神は、御自分のかたちにかたどってアダムとエバを創造されました（創1：26、27）。この事実は、彼らの品性だけでなく、身体的な面にも反映されていました。その「かたち」は、罪の存在によって損なわれ、隠されたために、贖いの働きによって人間を当初の状態に回復する必要がありました。その働きには、命の木から取って食べることのできない人間の身体的な回復も含まれていました。

この回復は人の一生にわたるプロセスであり、キリストがおいでになる時、すなわち、「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることにな（る）」（1コリ15：53）ときにのみ完結するのです。

使徒ヨハネは友人ガイオに宛てて次のように書きました。「愛する者よ、あなたの魂が恵まれているように、あなたがすべての面で恵まれ、健康であるようにと祈っています」（3ヨハ2）。

もし私たちが、人間は不可分の統一体であると認め、宗教が人間の生命のすべての面におよぶものであるなら、身体の健康を宗教的な義務として考える必要があります。私たちは、「食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」（1コリ10：31）との霊感を受けた原則に従うべきです。しかし私たちはなおも、善人が最善を尽くしながらも、人間の罪の結果とその罪に汚された世界に生きていることを忘れてはなりません。ですから、私たちは神に信頼して最善を尽くし、その結果は神にゆだねるべきなのです。